私のサイパン　戦死した父の面影を追って

静岡市清水遺族会　深津芙美子

昭和 17 年 9 月、27 歳の父に召集令状が届いたとき母は 22 歳、私はまだ母の胎内でした。父は静岡 34 連隊に所属、出征するまでの一年半は静岡連隊内におりましたので何回か面会したそうですが、私が 1 歳 8 カ月のとき戦死した父ですので、私にとっての父は仏壇の上に掲げられた写真でしか知ることができませんでした。

連隊が出発した日、祖母と私は静岡市鷹匠町の親戚の家に泊まり、表門の前で待機していたので、北門からとの情報を聞き回ったときは、すでに出発した後で見送ることもできなかったと聞きました。父の乗った列車は原駅に停車していたと聞き、知っていればせめてひと目でも会いたかったのにと母は言っておりました。

5 月下旬、横浜港に停泊中の船内で書かれたはがきが、当番兵の好意で投函され、家に届いたとのこと。残念ながら現在手元に残っていないので、私は内容も知りませんが、「後を頼む」というような、死を覚悟したととれる文面であったと聞いております。

母は 24 歳で未亡人になり、祖母と父の妹、私の四人家族の生活を守ってくれました。平日は製紙工場の工員として働き、日曜日は祖母と二人、少しばかりのみかん山と野菜畑の農作業をして生計をたてておりました。150cm 足らずの小さな体で、一度に 60kg あまりのみかんを背負い、山道を 4 往復していました。無理が続き、多発性慢性関節リウマチになり、手足の関節がひどく変形しておりました。それでも祖母を葬送り、祖母の七回忌の年の昭和 61 年 4 月、66 歳で亡くなりました。母は常日頃「一度、お父さんの戦死したサイパン島に行ってみたいけれど、この体では無理だから、あなたたち夫婦で行ってどんなところか見てきてほしい」と言っておりましたので、私も一度はサイパンに行ってこなければと思っておりました。

私の家では、父がサイパン島、父の弟がルソン島で戦死しておりますので、護国神社の命日祭には 3 月と 7 月の年 2 回参列させていただいておりますが、父の命日祭におまいりしたとき、護国神社の受付に 118 連隊の遺族の名簿が置かれ「遺族の方は記名してください」とありました。名簿すら存在しない『幻の 118 連隊伊藤部隊』の 50 年祭が行われることを知り、昭和 63 年 9 月 25 日、横なぐりの風雨の中参列させていただきました。荒天の中 200 名を越える参列者があり、そこでサイパン島から生還された澤野さん、土屋さんたちにお会い

することができました。帰還された方々は、玉砕から一年以上サイパンの山中で苦労されたにもかかわらず「戦死した戦友に申し訳ない」と、何回も個人で島へ行き、遺骨収集されていたとのことです。澤野さんのご実家にも私の父と同じ「昭和 19 年 7 月 18 日マリアナ方面にて戦死」という戦死の公報が届けられていたというお話を聞き、強いご縁を感じ「ぜひサイパンに連れて行ってください」とお願いしました。躊躇されていた澤野さんでしたが、慰霊祭のたびお願いする私に根負けし、4 年後の平成 4 年やっと同行を許していただきました。

この伊藤部隊は 3 分の 2 が海没、島に上陸できたのは 3 分の 1 弱とのことですので、何処で戦死したか知ることは難しいことですが、父の場合たまたま静岡の連隊で同室だった方が、玉砕の前日まで行動をともにされ、「チャランカの砂浜で蛸壺を掘って身を隠したが、総攻撃の前日、椰子畑のあたりで足を撃たれ、野戦病院へ行くことになり、深津君と別れた」と証言してくださいましたので、父が上陸でき、島のどこかで戦死したと知ることができたことは、不明の方々が多い中、これだけでも幸せなのかもしれません。

平成 4 年 6 月 7 日、伊藤部隊がサイパン島に上陸した日、名古屋空港から飛び立ちました。梅雨空の日本と違い、南に進むと白い雲の下に真っ青の海、リーフに囲まれた小さい島が見えました。「あれがサイパン島だ」と教えられました。48 年前、この小さい島の周囲を 800 艘もの軍艦が幾重にも取り囲んでいたとか・・・。ここに来るまでは、泳ぎの達者な父だというから近くの島に逃げられたのでは、というかすかな希望も、島を見たとたん逃げる隙間も無いことを感じさせられました。

空港に降り立つと、サイパン時間で午後 4 時、日差しはピリピリと肌を刺す暑さです。白い大輪のプルメリアの花とサイパン桜と呼ばれた赤い火炎樹が迎えてくれました。

翌日から第 1 大隊が転戦した戦跡を歩きました。サイパン神社、南冥堂、南興神社、南郷神社、フィナシス、ススペ湖、マッピー、タッポーチョー、千人洞窟、地獄谷、五根司令部、35 軍司令部、その他、澤野さんたちの歩みに必死でついて行きました。足をとめた場所場所、涙ながらに線香を手向け、家から持参した井戸水、米を供え、供養して歩きました。

翌日、サイパン、テニアン合同 50 年慰霊祭がサイパンの南冥堂で行われ、全国から 100 名ほど参列しました。式の前日、現地人のベッティさんが「自分の畑から日本人の遺骨が出たから来てほしい」と言われるので、その畑を掘ら

せていただくと、10 体分以上のしっかりとした白骨が出てきたので、その方たちの骨は、届け出た上一緒に供養させていただきました。まだ、そこここに遺骨が埋まっていることを実感させられました。

今年 6 月、私にとって 5 回目のサイパンに行ってきました。円安のせいか日本人の姿も少なく、閉じられた店舗も多く見られ、町も寂しく感じられました。南冥堂もあらされ、日本人が建立した慰霊碑も倒されたり、壊されているものがありました。若いサイパンの島民の中には「自分たちの島を墓場にするな」と言う人もあるとのこと。

ジャングルに入り、以前入った洞窟に向かうつもりが、草や木のツルが茂り、現地案内人のクルスさんがいてさえ道に迷い、1 時間以上ジャングルの中をさまよい、目的地どころかやっともとの道に戻ることができ、ほっとするありさまでした。地獄谷の 4 将軍が自決された大きな洞窟も、風化が激しく崩れて半分砂に埋もれています。あと数年もすれば、洞窟自体形がなくなってしまうことでしょう。

第 1 大隊の軍旗を置いたというフィナシス山の洞窟も、爆撃で山の形が変わったとのことですが、洞窟と言えないほど小さな岩場です。そこに『118 連隊霊位』の塔婆と父の塔婆を置き供養してきておりますが、私たち以外この場所に来る人が無いようで、行く度置いてきた 5 枚の塔婆がそのまま残っております。

このように、実際戦場になった場所は、生還者の方の案内がなければ訪れる人も無く、朽ちて今に分からなくなっていくことでしょう。

3 年前、主人と息子二人の家族だけで、サイパンに行ってきました。風化し、朽ちてしまう前にフィナシスと地獄谷だけでも見せたいと思ったからです。戦争の是非はともかく、祖父たちがこの地で戦い死んでいったという事実の現場を見せたかったのです。息子たちは何も言いませんでしたが、何かを感じ取ってくれたものと信じております。

自然は風化し、形は残らなくても、私たちは戦没者のことを忘れてはならないと思います。サイパンは島中何処も戦場でしたから、私たち戦没者の遺族は、どんな形でも一度はサイパン島を訪れ、島の土を踏むこと、それが一番の供養になるのではないかと感じております。

平成 11 年 9 月 24 日